
蒼き戦士の試練

柳野菜奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼き戦士の試練

【Nコード】

N5930X

【作者名】

柳野菜奈

【あらすじ】

28世紀初頭から始まった第4次世界大戦は、2730年の今、西軍、北アメリカ連邦・アスカル連合と東軍、新ソビエト連邦の対立の火が消えそうにはなかった。

日本は、憲法により、戦争は放棄していた。しかし、北アメリカ連邦の圧力を受け、戦争のために、アスカル・コロニーという国を作り、西軍で戦火に身を投じた。

西軍の戦力は、陸上兵による銃撃、空軍による爆撃、そして人型戦闘機<ヴレス・モード>。そのハイスペックな武器を開発しているのが、

——レイト・ウィバーという16歳の少年だった。

天才エンジニア、レイト・ウィーバー

——アスカル・コロニー軍、本部管制塔

「敵機、飛来！」

「目標、北8マイル。」

「数、150〜200機！」

敵軍の空からの攻撃に、管制塔内が慌ただしく熱を持つ。

「戦闘機<^{ファイター}アプリコッティ>50機、準備完了！」

「長官、出動命令を。」

高座に座る中年の男性が声を張る。

「<アプリコッティ>出動！」

「<アプリコッティ>出動！」

1人のスタッフがマイクに向かって復唱し、キーボードをタイプする。

いくつものスクリーンが戦闘機の離陸を映す。

「長官、<ヴレス・モード>が出ます。」

「うむ。」

<ヴレス・モード>の出動を許可する！！」

「<ヴレス・モード>出動！」

別のスタッフがタイピングを始めると、スクリーンが切り替わり、人型戦闘機の離陸が映る。

しばらくし、おびただしい数の期待が空を埋め尽くす。そして、すぐに煙と炎が空に広がる。小さな炎が煙を引いて落ちていく。

「——そろそろ終わりですね。」

管制塔の秘密回線に音声が流れる。少年の声のようだった。スタッフは慌てることなく、むしろ安堵の息を吐いた。

「ええ。君のおかげだよ。」

どうやら、今日発表された<ヴレス・モード>の新兵器、近距離型サーベル<レラル>じゃ大きな成果を上げたようだ、我らのスー

パー・エンジニア、ミスター・ウィーバー。」

その瞬間、一番大きなスクリーンが少年の顔を映した。

「ミスターはやめてよ。」

それより、ファースト・ベースに爆撃機が迫っている。対策を練ってね。」

少年のほうから、映像が切り替えられ、前線基地周辺の映像になる。スタッフが再び慌ただしくなる。そして、小さな機影が映った。

「…彼に逃げられないようにしなくてはね。彼がいなければ、この戦争は確実に負けるだろう。」

ファースト・ベースに間もなく爆弾が投下された。

—— 本部エンジニアリング局

「ウィーバー、おまえがいなかったら、この戦争は完敗だったよ。」

モニターにかじりついていた少年に、青年が声をかける。

「ありがとう。」

でも、オレは<ヴレス・モード>に乗りたい。そうすりゃ、カンペキですげえ楽しいのにな。」

モニターの前の少年は振り返って、青年に微笑みかける。

青年は、エンジニアの鈴原圭吾、すずはらけいご27歳。

少年は、天才エンジニア、レイト・ウィーバー、16歳。<ヴレス・

モード>やその武器の数々、戦闘機<アプリコッティ>、超遠距離型長銃<フリウムツ>を開発してきた。

そして今は、敵のコンピュータの奥深くまで、気付かれないように、ハッキングをしかけている。

「長官たちもひでえよな。」

おまえの母親がソビエトの人だからって、力はあるのに第一線に入れないなんて。」

レイトは、＜ヴレス・モード＞の開発者であり、ハイスペックなパイロットでもある。いままで、テスト・パイロットを務めた時のアクロバットは第一線のパイロットに引けを取らなかった。

「中立国ならまだしも、相手国だからね。エンジニアリング局に入れただけでもすごいよ。」

「そうか……。」

鈴原の眼には、目の前の少年が自分より10歳以上も年下ということが信じられなかった。

「さて、宿舎に帰るかな。」

レイトは、モニターのイグニッションを切り立ちあがった。

ハイスペック・パイロット、蒼真姫蝶

——上空

耳障りなノイズで、眠りそうだった頭をもう一度起動させた。暗号を早口でまくし立てられて、基地の状況が分かってきた。

戦闘が終わりに近づいたところ、基地に爆弾が投下されて、建物・スタッフ共に負傷し、しかも何人ものスタッフが亡くなったそうだ。

ゆえに、〈ヴレス・モード〉をすぐにゲート（機体の格納庫）に入れることができないので、間隔をあけて庭に待機させて、パイロットは各自宿舎へもどるように、と言われた。

10分ほどで交信可能域に入り、受信を告げるランプが点灯しているのに気づいた。スイッチを入れる。

「こちら、蒼真^{あおさね}。」

「やあ、元気？」

応答してすぐ、明るい声が聞こえてきた。誰だかわかっていたので、すぐに応答する。

「ええ、元気ですよ。少し疲れていますけど。」

木村さんも元気そうね。

通信相手は、同じ小隊の木村雪彦^{きむらゆきひこ}。明るい23歳だ。

「うん。」

でも実は、機体の足、撃たれちゃって。ランディングが不安だな。

「

足？」

木村の機体は後ろにいて、機体の首だけ捻っても見えなかったので、体ごと後ろを見ると、確かに派手に破損している。

「反対の足に重心を置いて、降りるのが得策だと思うよ。」

「うん。ありがとう、姫蝶^{きぢょう}さん。」

通信が途絶えた。

彼女は、蒼真姫蝶^{あおさねきぢょう}、18歳。〈ヴレス・モード〉のハイスペック・

パイロット。

ランディングして、宿舎に戻ると、シャワーを浴びた。

今日、この手で灯火を消した人々のことを洗い流すように、たつぷり1時間シャワールームにこもった。

出ると、夕飯まで時間があつたので、逆上せたのを覚ますためにも屋上に上がって、基地を見渡した。この基地は主に<ヴレス・モード>専用だが、時々戦闘機も来るから、そのために滑走路がある。そこに、大きな穴が3つ。<ヴレス・モード>の格納ゲートもいくつか破損している。自分のゲートは…無事だ。

「姫蝶さん。」

さつきから気配は感じていた。

「こんばんは、じゅつもんじあきお十文字さん。」

十文字彰男、27歳。同じ小隊のリーダーだ。

「こんばんは。」

十文字は、蒼真の隣2mほどあけて、柵によりかかるとたはこ莧に命を灯した。

「聞いたか？みねぎし峰岸くん、死んだって。」

峰岸は、蒼真と十文字の機体の専属整備士だった。腕はあまり良くなくて、愛想のよさだけが取り柄の男性だった。

「聞いてませんね。…そうですか、死んでしまったんですね。」

優しくしてくれたから、少しだけ淋しかった。

「遺体、見に行く？オレ、これから行くところなんだけど。」

「いいえ。行きません。」

親しかった人の死に顔ほど見たくないものはない。数時間前に、笑って送り出してくれた人が、冷たく硬くなっているなんて。

「わかった。」

あと30分ほどで夕食だから、その時には食堂においで。」

十文字は短くなった莧の火を靴の裏で揉み消すと出て行った。

そのときに、蒼真は峰岸のことからは離脱して、新しく補充されるであろう整備士について考えていた。

——腕のいいやつがいいな。

翌日

朝食はバラバラでとったが、昼食は小隊の全員がそろった。

「整備士がいなくて、どうやって整備するんだろう?」

昼食の席で、木村が言った。

昨日の爆撃で10人いた整備士は2人になっていた。これでは4、5つほどこしか1日に整備できない。

「今日はひとまず休みとなる。」

明日以降、整備士は増員となるそうだ。」

十文字が口を挟んでくる。そして、小声で囁いた。

「どうやら、レイト・ウィーバーが来るらしい。」

「は?」

「本当に?」

レイト・ウィーバーといえば、弱冠10歳で<ヴレス・モード>を作り上げ、そのほかにも<アプリコッティ>や<レラル>を作り上げたスーパー・エンジニア。

彼は今年16歳で、今は本部のエンジニアリング局にいるはず。

「彼なら、意識制御型ができますよね。」
コントロール・コンシャスネス

「……だろうね。楽しみだ。」

今の<ヴレス・モード>は操縦桿やレバーを多用するマニュアル・ハンドリング手動操縦型だ。しかし、もう1つの意識制御型を願望するパイロットが多い。

遠隔操作で、パイロットは直接機体に乗らず、操縦する。手動操縦型よりも動きが滑らかになるそうだ。

しかし、それを整備できるハイスペック・エンジニアがないのが現状。

——開発者なら、やってくれるはずだ。

今日は、フリーなので、久しぶりに銃を持った。
射撃場で、的に向かって銃口を向ける。躊躇なく引き金を引く。
爆音。

銃弾が的に吸い込まれるのを見た。

「お見事。」

少し驚いて、新たな的に銃口を向ける。が、相手はすでにこちらに銃口を向けていた。

「誰ですか？」

昼食から半日集中していたの邪魔されて少し邪険に扱う。

少年と青年の狭間にいるような男だった。細いフレームの眼鏡をかけ、本部の制服を着ている。

銃はもう、ホルダーに戻っている。

彼は証明書を見せて、無言で微笑んだ。

「…レイト・ウィーバー。」

年下には見えなかった。

「此処のトップ・ハイスペック・パイロットは女性だと聞いたんだ。

蒼真姫蝶さん。」

「何か用ですか？」

「注文があれば聞こうと思って。」

「？」

質問の意味が分からなかった。

「君の機体を最初にいじらせてもらうから。」

「は、本当に？」

昼に十文字が言ったことは本当だったのか。

「うん。」

今まで、いろいろ我慢してたから、いろいろある。

意識制御型への切り替え、サーベルの柄を長くすること、ライフルの銃身を短くすること、左足裏が右足のそれよりすこし薄いこと、

そして…

「首だけで振り返ると、どちらへ回しても死角になるところがあるの。」

これは前から嫌だったところだ。峰岸には直せないといわれていた。

「ああ、これは何度も言われたよ。」

オレがハンド・メイドしたキャノピーだとこの問題は起こらない。どうやら、制作局にオレの設計図通りに造らないやつがいるらしい。

「

直せる？」

「もちろん。明日には全部完成できるだろう。」

明日の朝6時。絶対完成させるから、乗りに来てよ。」

「ありがとう。」

やっぱり彼は、スーパー・エンジニアだ。

配属替え

前日

本部では、レイトに辞令が出されていた。

「配属替え？」

「ああ。」

前線のファースト・ベース、A・V・K基地が爆撃され、負傷者が出た。」

「もちろん知ってるよ。」

だって、オレが言ったんだもん。」

「整備士の数もスペックも足りないの、貴官に行ってもらったことになった。」

「了解！」

新型<アプリコッティ/マークD>で行くんで用意してくれます？」

高官は苦笑いして頷いた。

「わかったよ。」

ミスター・ウィーバー、健闘を祈る。」

「ミスターはやめろって。」

レイトも笑いながら、敬礼した。

次の日

着替え、パソコン、メンテナンス・ツールなどをトランクに詰めて今、<アプリコッティ/マークD>の前に立っている。

新型<マークD>は<マークC>までの欠点を改善している。

継続距離を伸ばすことと、火力・上昇力の向上に成功した。これに、今までの抜群の速力があって、最高の機体になる。

後の課題は、いかに軽くすることができるとエンジンがもたつく

ことへの対処だ。

「ミスター・ウィーバー、そろそろ乗ってください。」

以前の機体より狭くなったコックピットに、成長して大きくなった体と荷物を詰め込む。

キャノピーはあけたまま、タキシングする。

「出れますか？」

「うん。いけるよ。」

——いい天気だ。

キャノピーを閉めてロックすると、スロットルをあげていく。エレベーターをあげて、離陸。

滑らかな離陸だった。

——上空

今日は一人だ。

新品、ベスト・スペックの<アプリコッティ>に乗れるなんて、最高だ。

この機体の名前は、アプリコット（杏）から来ている。そのせいで、この機体は空でよく映える山吹色だ。

ミュージック・プレイヤーを持ちこんで、音楽を聴いている。

曲はソビエト出身の盲目の演奏家が奏でるジャズ。サクソフォンの音色が伸びやかに響く。

右手は操縦桿に、左手は首から下げているペンダントのトップを弄んでいる。

ペンダントトップは一つのリングで、レイトが母国を出るときに、母からもらったものだ。

母も父も生きているか分からない。郷里の地も攻撃されているかもしれない。

レイトが親を大切にしながらもソビエトを出て、相手国に来た理由は、エンジンアになりたかったからだ。

ソビエトでは19歳の徴兵年齢にならないとどんなに技術があっても軍には入れないし、今以上の戦具を必要としていなかった。しかし、西軍、特にアスカルでは、力があれば軍に入隊できたし、レイトの<ヴレス・モード>を必要としてくれた。うれしかった。

自分の技術が必要としてくれることに、心から感謝した。フライトは5分の4終わり、もうすぐ基地に着く。

空模様の移り変わりに感動しながらも、視界の端に、電波の受信を告げるランプが点灯しているに気付いた。

「こちら、上空。エンジニア・レイト」

「ファースト・ベース、A-V-K基地です。」

雲の下は小雨です。気をつけて降りてください。」

「オッケーです。」

更新終わり。

あと15分ほどだ。

だんだん寒くなってきたいたので、少し速度を上げた。

——新しい地、楽しみだ。

——A-V-K基地

木村は新しいスーパー・エンジニアの案内を任されていた。なぜ大尉でも隊長でもなく、自分なのか木村は少し悩んだ。

トランシーバーで管制塔を経由して、機体のパイロットと更新する。「着陸したら、滑走路の突き当たりを左です。100mほどで止まってください。」

「了解。」

少年の声が聞こえてきて、肯定された。

<アプリコッティ>は滑らかに降りたって、ランディングしてきた。木村はこの機体を納める格納庫の前にいる。

機体がこちらを向いて気付いた。

――<アプリコッティ>新型だ！

いままでの<マークC>は山吹色一色だったが、この機体は上の方が緑色の迷彩に塗装されている。

それに、カウリングの形が違うことに気付き、新しくなっているであろうエンジンに興味を示した。

アメリカ空軍に入っていた木村はわくわくした。

「ストップです。キャノピーを開けてください。」

木村は傘を持って翼に乗った。

木村が迎えに行ったのは、16歳の天才エンジニア・レイト・ウィバー。

――<グレス・モード>を壊したこと、怒られるかな。

「初めまして、木村雪彦です。」

コックピットから出てきた少年を見て、驚いた。

――16歳の眼じゃないな、この眼は。
鋭くて、でもどこか甘さも感じる。ビターチョコレートみたいだった。

「初めまして。レイト・ウィバーです。」

キャノピーを閉めると一緒に降りました。

彼は、整備士と一緒にウィンチで機体を仕舞い始めたので、手伝いながら話しかけた。

「これ新型ですよね？」

「うん。<アプリコッティノマークD>だよ。まだ実戦では使っていない。」

航続距離を延ばして、火力と上昇力を向上させたんだ。」

レイトは整備士に給油を頼むと、木村に同行して建物のほうへ。

「此処の、トップ・ハイスペック・パイロットは？」

「んー、姫蝶さんですかね。蒼真姫蝶さん。」

「女性？」

「はい。」

18歳なのに腕が良くて、かわいいつていうサイコーのパイロットです。」

ちよつと自慢気味に話してしまった。

「それはいいね。後で話させてもらおう。」

そして、2人で大尉のいる部屋へ向かった。

レイトだけが部屋の入り、木村は廊下で待っていた。

――後で、<マークD>を見せてもらおう。

「雪彦？」

ぼんやりしていたら、制服姿の男が隣にいた。

「十文字さん、こんにちは。」

「やあ。こんなところで何をしている？」

いきなり、彼は莨を吸い始めた。

「ミスター・ウィーバーです。彼の案内役なんですよ、オレ。」

「ああ。今日から来てるんだ。」

「そうだ、十文字さん。姫蝶さん、どこにいるか分かります？」

「姫蝶さん？」

昼からずっと射撃訓練してるよ。射撃場にいた。」

「そうですか、ありがとうございます。」

…十文字さんは、何をしていたんですか？」

今日はほとんどの人がフリーだから、十文字が制服を着ているのは何か任務があつたからだろう。

「明後日からの作戦会議。」

彼なら意識制御型ができるだろうから、順次改造をすることになった。」

「へえ、そりゃいいですね。」

「彼はどんな人だった？」

「…ビターチョコレートみたいな人です。」

「は？」

そこで扉が開いた。

「お待たせ、雪彦さん。」

… ああ、小隊長の十文字彰男さんですね？

初めまして、レイト・ウィーバーです。」

噂していた人がいきなり現れて、十文字は戸惑っているようだ。

「はじめまして。宜しくお願いします。」

「こちらこそ。」

雪彦さん、ここまでで結構です。」

「え？でも、部屋は…」

「B棟の405ですよ。大丈夫です、この基地のマップは頭に入ってます。」

では、失礼します。」

「あつ、姫蝶さんは……」

「射撃場ですよ。聞こえてました。」

レイトは軽く手を上げると去って行った。

機体整備

蒼真は、射撃場を出て宿舎へ向かっていた。

レイトは途中まで一緒なので一緒に歩いていた。

「え、ソビエト出身？」

「うん。エンジニアになるために、こっちに来たんだ。」

蒼真は驚いた。

なぜなら、蒼真もソビエト出身だからだ。でも、それは公開していなかった。

祖父がソビエトと日本のハーフで、蒼真は8分の1ソビエトの血が混ざっている。

「目が違うよね。黒でも藍でもない。群青色みたいな感じね。」

「…姫蝶さんも、光の加減で青みがかってるよ」

——ばれている？

「ソビエトの血、それは好戦的なのかも。」

それより、パーツがちゃんとあればいいけどな。」

今のは、故意的に話題をそらした。彼にとっても都合じゃないのかも。

「一応、最前線だから一通り物品はあるはずだけど。」

エンジニアが圧倒的に不足しているから、蒼真もいろいろ意見できるように、エンジニアリングを勉強しているのだ。

「意識制御型には、精密なデータが必要なんですよ。」

今日の夕食の後、基地の外にあるラボに来てもらえる？3キロくらい南なんだけど。」

「わかりました。」

初めて来た筈なのに、既にラボがあるってどういうこと？

「前線は、やはり空気が違う。臭いとか雰囲気とか。」

レイトは宙に向かって鼻をくんくんとさせてみると、うれしそうな顔をした。

「蒼真さん、ちょっといい？」

管制塔の前を通りかかった時、蒼真はほかのパイロットに呼ばれて、レイトと別れた。

用事が終わり、ゲートへ向かった。

「あれ、レイトさんは？」

もう整備を始めているのかと思ったが、ゲートの中に姿はなく、ほかの整備士しかいなかった。

「レイトさんは、パーツを取りに行きましたよ。」

「そして今帰ってきたところ。」

振り返ると、電動カートを操作しているレイトがいた。

「何か用？」

「えつと、どんな整備をするのか気になって…」

「こいつのことが心配なんだ？ いいことだね。」

レイトは軽々しく機体のことをこいつと呼んだ。

「まあ、オレはこいつのスペシャリストだから、大丈夫だよ。」

「そう…ですか。」

スペシャリストとはいえ、所見の機体だ。

パイロットの好みによって細かなところは変わってくる。どうするつもりなのか。

少しうつむいていると、レイトはすぐに声をかけてきた。

「でも、姫蝶さんの好みに調整する必要があるから、いてくれないけど。」

顔を上げると、レイトは微笑んでいた。

心を読まれているようで気に食わないな。

レイトは、顔を引き締めて、カウリングの外された機体を見て言った。

「このエンジン、汚れているね。最後にクリーニングしたのはいつ？」

「えっと…1年くらい前かな。」

フリーがほとんどないから、エンジンのオール・クリーニングは滅多なことできない。

「<ヴレス・モード>のエンジン<ドライビング・マークC2>は、エンジン・クリーニングを3カ月に1回はやってほしいんだけどなあ。

特に意識制御型はエンジンが汚れていると機動障害がおこるからね。」

峰岸はそんなこと言ってなかったな。

「…ん？」

エンジンが取り出され、クリーニングされているとき。

ころん…とエンジンから金属が転がりだした。

「プラグが取れた。」

プラグ（イグニッション・プラグ）はシリンダ・ヘッドに取り付けて、火花放電によりシリンダの中の混合気体に点火する重要なパーツだ。

「…よくこんな機体で、トップ・マークを出せたね。」

レイトは苦笑いをした。

やっぱり、峰岸は腕の悪いメカニックだった。

お出かけ

「さて、そろそろ夕飯の時間かな。」

レイトは蒼真の協力のもと、＜ヴレス・モード＞を整備していた。蒼真の機体は、予想以上に酷い有様で苦労した。

すっかり固まった足腰を伸ばすと、携帯端末を持ってゲートを出た。

「やあ。レイトだけど、そっちはどう？」

相手は、ラボの設備を運ばせている本部のスタッフ。

「それが……スキヤナの接続に手間取ってまして……」

「終わってないんだね？」

「ええ。」

悪びれもせずに想定するスタッフに苛苛させられる。

「わかった。1時間後にオレが行く。」

それから、＜なきい 尻伊・花風はなかせ>は持ってきてあるだろうな？」

「はい。もちろんです。」

こっちは持ってきていなかったら、本当にスタッフを殺すところだった。

「うん。じゃ、またあとで。」

＜尻伊・花風＞を使ってもらうのが楽しみだ。

「…姫蝶さん。夕食を食べに行こう。」

まだゲートの中にいる蒼真に声をかける。

「姫蝶さん。」

まだ食事をしている蒼真に声をかける。

「一緒に行きましょうか？」

オレ、車持っているから、バイクで行くよりいいと思いますけど。」

蒼真がほかの兵士からバイクを借りているのを知っていたので、誘ってみた。

「いいんですか？」

蒼真は素直に頷いた。

「うん。」

じゃ30分後に南口門で」

レイトは一人食堂を出た。

「君は…人嫌いなのかな？」

薄暗い廊下にでたところで声をかけられた。

黄色い頭髮が見えて、ヨーロッパ出身のパイロット・ヨハンだということが分かった。

「人は好きじゃないよ。嫌いでもないけど。」

「あっそ。」

そつちから訊いてきたくせに、素っ気なく返された。

ヨハンを無視してゲートまで戻ってメンテナンス・ツールなどを持って駐車場へ。

この時代、自動車の運転資格は15歳以上、1か月の教習だ。

レイトは、1年前に免許を取り、車も持っている。

エンジンで儲けたお金で、高馬力の黒いスポーツカーを買った。
オートドライビングシステム

自動運転型もあったが、ドライブが嫌いではないので従来の自動車にした。

メンテナンス・ツールを積んでいると蒼真が来た。

「お待たせしました」

蒼真の制服姿は初めて見た。

本部のユニフォームとは違って、ここのユニフォームはジャケットだけだ。

大きな襟のついたノー・スリーブの膝上丈の深緑色のジャケット、その下にはライダースーツのようなぴったりとしたつなぎをきている。

「行こうか」

「はい」

右のドアを開けてつやっ
て蒼真をのせると、左の
ドアから乗ってハ
ンドルを握った。
無言で発進した。

ラボへ

車内は静かだった。

カーステレオが放つ、澄んだ曲だけが空気を震わしていた。

蒼真は盗み見るようにレイトを見た。

視力治療の進んだ現代では珍しい、細い黒のフレームのメガネ。その奥に鮮やかな青藍色の瞳。本部の制服——薄くて強い生地の白いコート、首元にきちんと結ばれた黒いネクタイ、グレーのスラックス——を不自然じゃなく着こなしている。

「…あんまり見られると恥ずかしい」

「あつ、ごめんなさい」

レイトの言葉遣いは、事務的で堅苦しいこともあれば、年齢や地位を気にしない気さく話し方でもある。

「姫蝶さんのほうが年上なんだし、敬語じゃなくていいよ。」

オレなんて、本部の長官でもこんな口調だし」

「それはそれで、問題なんじゃ…」

蒼真の言葉は、カーステレオの曲で消された。

曲は錆にはり、サクソフォンの音が響き渡る。

「この曲、ソビエト出身のジャズ・バンドが弾いているんだ。」

オレ、このサックス奏者が好きなんだ。彼、戦争孤児で盲目なんだよ」

「目が、見えない？」

「うん。オレらだったら、もう戦線には立てないね。でも、彼は第一線にいる」

レイトが何を言いたいのか、まったくわからなかった。

「オレは前線で戦えないけど、」

パツとひらめいた。彼が言いたいことが。

——オレの技術は第一線で戦っている。だから、

「姫蝶さんには存分にこの戦いを楽しんでほしい」

「…楽しむって不謹慎な」

言葉と裏腹に頷くと、レイトは微笑んだ。

左手に建物が見えてきた。

車から降りて、建物を観察した。

丸太を積み上げた大きめのログハウスで、2階建て。

前庭には、レイトのスポーツカーに加えて、トラックが3台。

レイトは迷わずに扉を開けた。

中では広い空間で5人の男が作業をしている。

「圭吾さん」

一人に声をかけると、顔を上げた。

「よお、レイト。」

あんまり久しぶりじゃないな」

「うん。1日ぶり」

「そっちの姫君は？」

姫君っていつの時代だ、と心で突っ込んでから紹介する。

「ファースト・ベースのトップ・パイロットの蒼真姫蝶さん。」

彼女の機体の設定変更とく風伊・花風>のテストをしてもらう予定」

圭吾は大いに頷くと、蒼真にあいさつした。

「やあ、蒼真嬢。オレは鈴原圭吾。本部のエンジニアだ。よろしく」

「あ、よろしく願います」

蒼真はぺこりとお辞儀をすると、差し出された圭吾の手を握った。

「で、どこで止まってるわけ？」

作業の遅れを取り戻す。

元からこのセッティングは難しかったが、本部のエンジニアリング局の面子なら大丈夫、と思ったのが間違い。

彼らの3時間の労働を30分で熟し、蒼真を呼ぶ。

「姫蝶さん、これからこのスキヤナに入ってもらいます。

服を脱いでください」

あ、さらつと難しいこといた、と6人の男は思った。が、蒼真はその通りに服を脱ぎ始めた。

スキャニング

「服を脱いでください」

男が女に対して、これを言うことはそうない（特別な関係がない限り）。しかし、そんな状況だった。

制服のジャケットを脱いで、ライダースーツのファスナーを下ろす。「すまないけど、圭吾さんたちは上の階へ。集中したいので」

レイトはさりげなく、ほかの5人を押しやった。足音が階段を上っていく。

するりと袖を抜くと、パンプスを脱いでから、服を脚から抜き取った。

椅子の背にかける。

同室者を見ると、彼はスキャナに触れていて、こちらは見ていない。そういう気遣いは出来るようだった。自分より大人な気がして悔しい。

「姫蝶さん」

「はい!？」

いきなりで頓狂な声を上げた。

レイトはいつの間にかこちらを向いていた。

キャミソールと薄いショートパンツ（その下に下着）という露出の多い格好でも、興奮している様子はない。

「それ以上脱がなくていいです。こちらへ」

レイトの示したスキャナは、大きめの操縦席のようだった。

座席に座ると、レイトがベルトを着けてくれ、そのうえでヘッドセット——バーチャル・ワールド——ゴーグルとヘッドフォン——をつけた。

「これから、仮想世界で戦ってもらいます。いつも通りにしてくださいね」

濃い色のゴーグルでうつすらとしか見えないレイトがノート型端末

を操って約10秒後、周りは戦場^{ソラ}になった。

いつもの蒼真の<ヴレス・モード>。武器は<リアル>。

相手は双発の旧式戦闘機と単発の新鋭機<スカイ・バッドJ3>だ。旧式の<グリッドルC>は射程距離が短く、<スカイ・バッドJ3>は長めである。

どちらとも戦ったことがある。

敵がいるなら、倒すだけだ。

スロットルを上げて、双発に近づく。

ゲーム・スタート
戦闘開始。

「おつかれさま」

レイトは、戦闘を終えた蒼真にガウンとタオルを差し出した。

「ありがとう」

「データは十分に取れた。」

明日からは、そっちの部屋にあるカプセル（遠隔操縦用カプセル）に入ってもらって戦うことになる」

「わかった」

ガウンを羽織った蒼真を2階のリビングに案内すると、交代で圭吾たちを呼び出した。

「明日までに何個カプセル用意できる？」

「そうだな…、10個つてところかな」

「じゃ、全部持ってきてください。」

あと、この前伝えたこと、準備してありますか？」

「ばっちりですよ」

「じゃ、お願いします。」

あとは、オレがやるんで、帰ってもらっていいです。ありがとう
ございました」

レイトがそう言うと、5人は帰り支度を始めた。

「レイト、無理すんなよ」

圭吾は最後に労いの言葉をくれた。

トラックを見送ると、2階へあがった。

凧伊・花風

2階へ上がると、ソファで蒼真が寛いでいた。

「大丈夫？」

バーチャル・ワールド
仮想世界での戦闘はかなり激しかったので、消耗が気になっていた。

「うん、大丈夫」

「シャワーあるけど使う？」

「いいえ、宿舎に戻ってからにするよ」

「そうか。」

「実は、試してほしいものがある」

そういうと、リビングの机の中央ディスプレイを操作して、ファイルを展開した。

「<凧伊・花風>？」
なぎい はなかぜ

「ああ。」

中・長距離用のショット・ガンだ。

威力はAクラス

<リアル>はBクラス、<フィリウムズ>はB、<ヴレス・モード>は特Aクラスである。

アクザイリアリイ・サイテイング

「照準補助はつけてないから、当たらないことも考えられるけど。」

「…どう？」

蒼真は考える仕草をした後、口を開いた。

「…いいよ、やろう」

蒼真は立ち上がった。

「OK」

「じゃあ下に来て」

階段を下りると、カプセル用の端末ターミナルに触れた。

蒼真と自分のデータをカプセルに送信し、仮想世界にある2人の<ヴレス・モード>にアクセスした。

「入って」

カプセルの蓋を開けると、中へ誘う。

蒼真はガウンを脱ぐと中へ入った。

ヘッドセットに加え、ボイス・アシスト・マイク（ヴァムVAM）をつけ、手足を固定すると蓋を閉めた。

ノート型端末とヘッドセット、VAMを自分と一緒にカプセルに押し込み、自分も戦闘への準備をする。

端末を操作して、仮想世界へ入る。

何もない空に青色の機体がある。

相手からは自分の黒の機体が見えることだろう。

通信で蒼真に話しかける。

「姫蝶さん、どうですか？これが、コントロール・コンシャネス意識制御型です」

「…予想以上ね。」

意識制御型ということと、レイトにフル・カスタマイズしてもらった機体。すばらしい」

「ありがとう」

——M4・SHGN

VAMにそう伝える。

これは、<凧伊・花風>のパスワード。

パスワードを言うと、<ヴレス・モード>の大腿部にある武器格納庫ホルスタの力が解除され、武器が出てくる。<リアル>も<フィリウム>もこのシステムだ。

ホルスターから、薄桃色の銃が現れた。

「これが、<凧伊・花風>です。」

そっちのホルスターのパスは——C5・SHGN——です」

蒼真も同じ武器を取り出した。

「一応、弾が出るようにしてあるけど、敵を出して撃ってみる？」

「そうね…うん、やってみる」

「じゃ、ちよつとお手本を見せようか」

VAMで呼び出すと、＜スカイ・バットJ3＞が数機出てくる。

＜風伊・花風＞を持ち上げると、トリガー・ロックをリリースして、^{トリガー}引金を引いた。

約コンマ3秒後、およそ100mほど離れたところの敵機を瞬時に^{ダミー・ファイター}大きな炎の塊にした。

「…すごい」

「やってみて。」

基本的には、ダブル・アクション（トリガーを引くことにより、ハンマー（撃鉄）が通常位置から撃発準備位置まで後退し、そのまま撃発される作動機構を指す）の銃を変わらないから」

蒼真は普段から、射撃訓練を怠らない人だと聞いているので、銃器の扱いには慣れているはずだ。

爆発音が聞こえてすぐ、150mほど遠くで爆発が起きた。

「…いいわね、これ」

「オレも使ってみて、予想以上の結果を得れました。」

威力レヴェル・Aクラスという判断は本部からもらったけど、結構な威力だな」

「今度の実戦で使わせてもらえる？」

「もちろんです。」

明日以降、実戦用のプログラムに入れて、使えるようにしておきます。

じゃ、これで仮想世界への接続をはずします」^{「ネクション」}

ターミナルを操作して、仮想世界から離脱する。

カプセルの中で覚醒した。
目を開いたとき、蒼真は視界の隅に、こちらへくる男の姿を確認した。

「お疲れ」

カプセルの蓋が開いて、その人の手が伸びてくる。

彼は、蒼真のヘッドセットをはずしVAMを取り外すと、手足のベルトを外してくれた。

一人では起き上がれず、彼の手を借りた。

彼の手は、氷の如く冷たく、一瞬手を振り払いそうになった。

しかし、無事に起き上がってカプセルの外へ出た。

「事後承諾で悪いけど、この意識制御型はめちやくちやスタミナを使うことになる。」

手動操縦型よりよっぽど疲労がたまる。でも、その分成果は上がるから、それでいいならこれからも使ってくれ」

事務的で温度のないその言葉に、少しだけ失望しながら、意識が遠のくを感じた。

「まあ、ゆっくり休んで」

最後に聞こえたその言葉に、僅かでも温度があることにほっとしながら、現実からログ・アウトした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5930x/>

蒼き戦士の試練

2011年12月4日14時45分発行